大学院特別講義

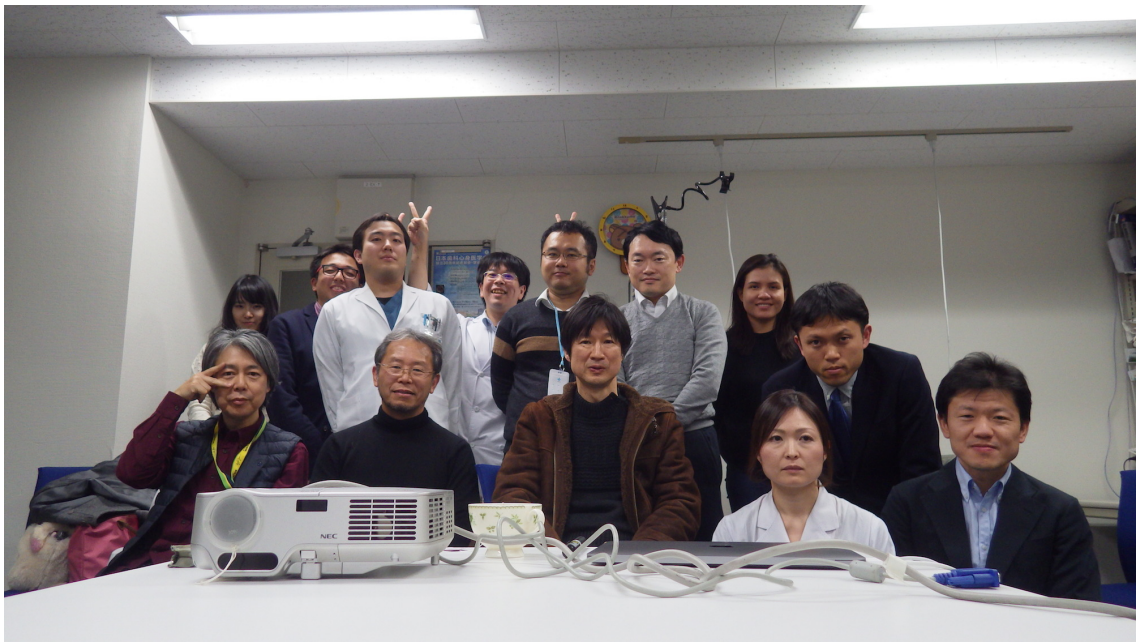
記

１．講師　川添記念病院　精神科　本村春彦　先生
２．演題　「病識とはどんな感じのものか？」
３．日時　2019 年 11 月 29 日（金）18：00～20：00
４．場所　10 号館２階　歯科心身医学分野研究室
５．要旨；
「病識」は、歯科医師にとって身近な概念とは言い難いが、歯科心身部門の診療では、しばしば問題になることがある。病識とは一体どんなものか、なぜ重要なのか、それをどのように評価していったら良いかを概略する。また病識の代表的な評価尺度も紹介しながら、実際に歯科心身診療に役立つ尺度を参加者に考えてもらう予定である。

今回の本村先生の講義は、「病識」について。当科の患者さんでも、お困りの症状について「歯そのものが原因なのか、他にも原因があるのか」を巡って、特に治療法の選択の際に問題になることがあります。例えば、「この歯の咬み合わせを元に戻せばいいんだ」と主張される Phantom bite syndrome の患者さんから、心身医学的な治療に同意を得るのはかなり困難なことがあります。

ところがこの「病識」という言葉は、一意的に定義することが案外難しく、これまでも様々な定義がなされてきていることのお話から始まりました。英語では、lack of insight, poor insight, denial, attitude about illness, awareness of illness・・・などなど、多彩な意味を含有します。ですが、「病識」がないと治療できないし、仮に良くなってもすぐ悪くなる、のは同意できます。精神科領域だけでなく、例えば糖尿病の患者さんや歯周病の患者さんなどでも問題になるキーワードです。まずは言葉の定義より、このような臨床現場での具体例をみんなで思い浮かべながら、感覚の受容から記憶との照合や思考など、脳の情報処理過程のどのレベルで「病識」の問題が生じるか等、広がりと深みのある概念を共有していくお話でした。

さらに研究的な試みにむけて、BIS, BCIS, SAI-J, SUMD-J など統合失調症で用いられている病識の評価尺度の紹介や当科での応用の可能性について言及して頂きました。「病識」にお受験的に一意的な定義を与えるより、「答の出ない問いかけ」のまま、みんなに宿題として残された、知的に生産的な講義でした。



福岡歯科大学高齢者歯科の内藤徹教授と内科医の岡山先生にもご参加いただき、

鋭い質問やコメントで議論を深めて頂きました。

講演後の懇親会。少し地味ですが、コスパの高い（カロリーは控えめの）おつまみを院３年生の須賀先生が準備してくれました。いきつけの居酒屋さんには誠に申し訳ないのですが、大学が貧乏シフトしていく中、こういう飲食サービスは非常に有難いです。こぢんまりでも和気藹々と話が弾み、今後も考え続けるお題を議論しました。（文責；豊福）